

「利根川水系利根川・江戸川河川整備計画（原案）」に対する公聴会

平成 25 年 2 月 24 日（日）14:20～14:35

さいたま新都心合同庁舎検査棟 7F

発言者：公述人 7

■■■■と申します。さいたま市から来ました。きょうの公述人がこういう形で行われるということが全く予測できなかったものですから、原稿を、紙を用意してなくて、話がいきあたりぼったりになるおそれがあるといえはるんですけど、その点よろしくお願ひします。私の話は荒川の沿岸の、荒川の調節池は、水位予測をちょっと書いておりますけれども、この荒川というところを利根川というふう読み替えていきますれば、十分意味が通じますので、よろしくお願ひします。実は利根川のことあんまり良く知らないで、最近までいたんですけど、3日前に稲戸井の調節池に行ってきました。そして非常に狭い河道で日本一の利根川の河道としてこんな狭い川幅で、もつものじゃないというふう自認してきました。それであの8年ほど前に荒川で調節池を計画するときに、これはだまされているなということに気がつきまして、中止するように宣言してきました。荒川の第2調節池はそういうことで中断しましたけれども、利根川では相変わらずどんどん、どんどんどんどん造り続けて、稲戸井は完成し、さらに烏川の調節池ではこのようなことが、今度の計画の中に盛り込まれていますので、ぜひやめたほうがよいと言うつもりできょうは公述に来ています。なぜ、調節池が洪水を起こすかと言いますと、従来の調節池は洪水を調節する原理というのは、川の中に囲ぎよう堤というものを造りまして、そこに越流堤というものがあると思うんですが、洪水の初期の水は出来るだけ池に入れないようにして、池を空っぽにしておいて、そして川の水位が上昇して越流するようになると、その分、下流に水が流れないだろうと、川に水が行かない、下流に水が行かないということは、その分、確実に下流の流量が制限できると。だから、下流の洪水を防ぐために調節池が有効であると。こういう理屈で調節池が全国に造られています。もちろん、利根川も同じ理由で造られているんですけども、そこで非常に大事なことが、調節池を出来るだけ大きく造りたいんですよ。溜める水の量を多くしたい。そのために、河道のある部分を削って、非常に狭い河道にして、その分、調節池を大きくするというをやってきたわけですね。荒川の場合は河道幅の半分を調節池にしてしまったために、流れる流量が、もちろんこれは高水敷にあがってからの話ですけど、要するに川幅を半分にしてしまった。そのために流れる量が半分になってしまった。そうすると、流れない量がどこにあるかという上流域にあるんですね。1つは河道狭窄による堰上げ、堰上げによって上流側が水位上昇すると更にその上流は水の流れがなくなって貯留する。貯留するその積算が川の水位ですから、どんどん川の水位が増えることで、調節池を付けるとその上流部に非常に大きな負担になる。河道部分で水が留まることになるわけですから、非常に大きな負担になるということで、水位上昇を起こしてしまう。というのが上流域は洪水を起こしてしまう原因なんですけど。今までのそういったような洪水のピークをカットして、そのカットした分、下流に流れないというような発想なんですけども、実は、その程度の洪水というのは、ほとんど洪水が安全に流れない、中規模の洪水の場合はこれでいいんですけど、これは別にあってもなくてもどうでもいいような洪水なんで、それで越流させたと行って大騒ぎして宣伝する。これ全くばかげた話です。それでこれがどういうことかという、越流して川の水が調節池に入るわけですけども、少しは。要するに河道の掘削によって洪水の初期から水が貯まりますので、その貯まった水によって水位上昇を起こすためには越流してい

ると考えている。非常にばかげた越流になっていて何も調節していない。しかし、それでも一応、河道にあった水が右側の調節池とかに流れ込んでいて、要するに低水路も支障がない水がいつてはいけないところにいたりするだけの話です。堤防の後ろに水が存在するということは何も変わらないわけですね。それでなぜこういう状態になるのはどうしてかということ、池の水位が川の水位に追いついてしまうんですね。それをみるとピークの4時間前に既に池の水位が川の水位に達してしまって、ピークの時に全く洪水を調節しない、川の水位と一緒にあって池の水位も上がっているということでこの間全く洪水を調節しない。要するにピークをカットするということは、こういう状態の時には、全くカットできないわけですね。しかも狭窄している川に洪水の全量があるわけですから、それは非常に危険な状態になって、どんどん、どんどんその状態のまま順繰り水位が上がっていくということなんですね。調節池の中がどうかというと、ほんとうに遊水池の状態となって、川の水が土手に触って瞬時に洪水調節するんですね。こういうふうになってしまうと、全くその狭窄した河道の中に要するに全量が、非常に危険な状態となるんですね。それと更にそのまま、例えばハイウォーター（H.W.L.）のような、いわゆる高水位まで達したとすると、例えば、妙な話ですけれども、池がまだ空っぽなのに越流している。越流していながら川はハイウォーターになっているということだってあり得るわけですね。渡良瀬遊水地なんかまさにそういうケースで渡良瀬の上流があふれてしまう可能性があるということです。そういうわけで、もっぱら洪水調節に調節池が洪水に到達して有効かということと全くないというのが僕が荒川の調節池で証明した結論です。それで、そういう目で烏川の調節池の計画があるのかもしれない、それをみると非常に不思議なものがある。高水流量が17,000m³/s、3つの河川の観測所によって流れたもので、それを八斗島で足し算すると、3つの河川を足し算すると、八斗島で17,000m³/s流れるということなんですけど、流速6mで上福島地点ですか、そこを流れ、同時に八斗島でも流速6mで通過するなんていうのは、ほぼ絶対に無いと確信できます。確信します。荒川の施設で、同じように太郎右衛門のところなんですけど、その上流に、広い高水敷があるんですけど、その部分でだいたい熊谷でピークのとて、7,000m³/s流れてきて、だいたいおよそ中間の広い河川敷で吸収されます。太郎右衛門に来たときには、既に半分の水が中間の河川敷で減衰して、このように半分になっちゃうというようなことが起こります。これは今資料を取り寄せて調べているのですが、やはり烏川の上流にある大きな土地というのは、カスリーン台風の洪水で烏の上流というのは八斗島の上流ですけれども、当然かなりの水が貯留されるのは間違いないでしょう。そうすると上福島の60%で計算しますと、途中で貯留されてきますから絶対に八斗島で17,000m³/sなんかになるわけがない。荒川では、さっき半分が貯留と申しましたけれど、そのとき半分はいかにもすごいなというふうに……。野帳に、観測を原点に戻って調べると、それをぎりぎりまでしぼったんですけど、それでも30%は減衰という水が減って、下流に到達しているというのがわかっています。利根川でも一緒に重ねて、烏川の上流をみると、絶対に17,000m³/sになんかならないと言えらると思います。貯留されるのが、八斗島の流量が全く出てこないというのが非常に不思議に思っているんですけど、技術者の方が、専門家の方が、これを指摘された方がいいんじゃないかと思うんですけども。素人でさえある程度のことわかるんですから専門家ならもう聞いただけですぐわかると思っちゃうんですけども、皆で何にもいわない、非常にそれが不思議な感じです。これもあわせてこの利根川の調節池も非常に不可思議な存在になっていて造り続けるということをやをせひちゃんと考えなければいけない。更に時間はまだあるのですか。もっと言えば稲戸井の狭窄によって上流域は水が貯留する。これは実は下流の洪水を制限する、そういうところはなんか意味があるような感じがしなくもないのですが、しかしこれはカスリーン台風級の大きな出水がきてその貯留が、上流に貯留したとなると、上流と稲戸井の調節池の上流、その狭窄の下流、こ

の水位差が非常に大きくなったときにどうなるかという、非常に高速で稲戸井の前の河道を急速で下流に流れていくような状況が起こります。これこそ下流は水をうけて、下流部の洪水にもものすごい反応が起きてしまうという可能性がないわけではない。この辺は、何かいかにも専門家が間違いないみたいな言い方でちゃんと計算しているからみたいなことで説明されていると思いますが、僕のほうはとてもじゃないけどそんなもんは嘘だと、積極的に……。だいたいそういうことでぜひ専門家の正確な原案を期待しております。

以上